

江口隆哉の残したもの

金井美三枝・西田堯・花柳照奈
松本千代栄・桜井勤（司会）

桜井 江口先生に学ばれた金井美三枝、西田堯、花柳照奈の諸氏と学校教育の立場から松本千代栄先生にご出席戴き、それぞれの方からお話をお伺い致したいと存じます。

金井 今回江口門下の方々より沢山の資料をお寄せいただきましたが、中に新潟の五十嵐瑠美子さんから戴いたものがあり、これは江口先生が五十嵐さんのお父様に宛てた手紙です。「待てど暮せど来ぬ人を…ボンボロボン…」で始まるこの手紙は、『なにやとやら』『スカラ座のマリ使い』を創った江口先生らしいユーモアにあふれた書き出しで始まります。「二階堂体育専門学校やその他から講師として委嘱されましたが、私としては肩書きは不要、舞踊家でいたいとお断りする所存でありましたけれど、二階堂体育専門学校へ指導にゆくことになりました」と書かれています。ちょうど文部省指導要領が今までの行進遊戯から昭和22年に創作ダンスと名称を変えたころのことで、私（金井）はちょうどその頃江口先生の研究所に入りました。「ヨーロッパへの旅立ちを第1期とすれば、この戦後すぐの文部省指導要領が新しくつくられたことは、舞踊界全体への影響という点で、それまでモダンダンスの普及につとめて来た江口先生にとって第2期を迎えて重要な転換といえます」。

江口先生のモダンダンスが採り入れられて、指導要領だけは180度の転換をしましたが、まだモダンダンスが人に知られていない頃でしたので、どうしていいかわからず、小学、中学の先生方が話を聞きに来られたり、各地で先生方を集めて専門指導者の講習会を行ったもので、私もお供をしました。さらに先生の手紙では「今までの振付け舞踊を捨てて下さい。それは基本動作や解釈はまちがっていないが、音楽の使い方に問題がありました。今までは指導者が音楽に振付けたダンスを与えていましたが、これはまちがっています。新しい踊りは踊る人たちが生み出し作りあげるもので、自分の感情に即した踊りでなければなりません。上からあたえることを、いつのまにか安易な方法で続けてしまった。芸術的良心がゆるさないので」と詫びが書かれています。

江口先生が、童謡に振付けた『お猿のかごや』や『月の砂漠』にしても芸術味がありましたが、先生の戦後をむかえて新しい時代に即した創作指

導の方法が、この手紙には詳しく書かれており、この手紙はコピーして展示室にならべて置きましたが、創作指導への指針として涙なしには読むことが出来ないものです。江口先生の謙虚な姿勢を、これからも大切にしたいと思っています。

西田 昭和25年、帝国劇場で見た『イゴザイダー』の男性の踊りを見て非常に印象にのこって、これは男の踊りだと、教えるこうたわけです。僕は白い紙に、にじんでゆくように先生の一言、一投足がにじみこんで色んなことを教えていただき踊らさせていただき勉強しました。稽古場では一寸した話がつみかさなって、モダンダンスとは何か、日本人には日本人のモダンダンスが出来るということを教えられました。

江口時代の作品は、スケールが大きかった。作品の考え方、とりくみ方のスケールの大きさ、『プロメテの火』も『日本の太鼓』も、根本にあるものの壮大さが、素晴らしいと思う。

『日本の太鼓』を例にとっても、それを作り上げるのに現場へ何度も行って時間をかけて作り上げて行ったので、その態度に感激されたのか、上演の時には現地の人がわざわざ見に来て下さったり、今日も鶴羽衣（ツルハギ（鹿おどり））の師匠さん、菅原さん御姉妹が盛岡からみえています。先生の文章があります。

「私はもう4年も続けているのだが、まだ1度も踊り方や太鼓の打ち方をおそわったことはない。そのまゝ踊るのでは意味のないことで、郷土舞踊のもつ特有な鄙びた感じを出そうとしても、出来るわけがない。オーケストラの伴奏で近代的な劇場で上演するにふさわしいものを作り出さなければならない。今の私には展開する鹿おどりの独特な雰囲気と特徴として底に流れるものを、かみしめることだ」。

私はいつも作品をつくる時、このことをもう1度よみ直して、自分をよびもどすものとして大事にしているのです。特に民族芸能とか日本の伝統的のものを作品化する時には、その動きをそのままってきたのでは現地には良いものがあるのでその奥にあるものを、つかみ出してきて新しい方法で創り出してゆくことを心がけています。

『日本の太鼓』を創る時は、作曲する人も美術の人も幾度も同行して作っているのです。これを3回忌の時に10何年ぶりに復元したのですが、音

楽が幸いに残っていて、ビデオもなくちょっとした写真しかなかったのですが、池田さん達と集まって、あーでもない、こーでもないと思いましたが、その時に感じたのは動きと作曲が非常に密接に出来ているので、ちがう動きをすると体がちがうと云う、ビデオで収録したものは9割9分再現出来たと思っています。江口時代の作品の音楽家、美術家、振付者は本当の意味の共同作業として作品が創られていて、これは1つのモダンダンスの原点であると思っています。伝統芸能だけでなく『作品7番』を始め色々名作があって群舞構成のやり方とか、リズムのあり方とかを、おそわってきました。先生の作品は各門下生の方々、講習を受けた方々の体の中に残っていると思われまゝ。さらに『現代舞踊』という小冊子をつづけておられ、良いことを沢山書いておられました。

「江口隆哉と芸術年代史」を西宮安一郎さんが編集され、これには大事なことが載っていて、この1冊をおすすめします。江口隆哉の1つの魂が詰めこまれた文章がたくさんあります。江口隆哉が残されたものの1つだと思えます。

花柳 昭和27年に藤蔭美代枝（のちの静枝）さんの会で江口先生の書かれたものを読み、洋舞を身につけて創作しようと思いました。花柳寿々紫さんが習っており、先生の所へお伺いしますと『プロメテの火』、日本の太鼓の『鹿（しし）踊り』の稽古が行われていました。その後、研究所でモダンダンスを学んでいましたが、ある日先生が「そこで踊っているのは日本舞踊の人でしょう。踊りはオオシク踊らねばならぬ」とおっしゃいました。大きく踊るという意味です。昭和31年にいよいよ先生の作品『プロメテの火』の群舞に出ることになり、日本舞踊名でなく変名を使って70名の火の群舞に入って踊りました。31年先生は門下生をスタートさせるために、その場を確保されて皆を踊らさせました。私も2代目寿輔先生の「花柳舞踊研究会」に、29年1度出て、31年『習作』を発表、先生にお習いした成果を作品にしました。先生が見に来てくださって楽屋にメモをとどけて下さいました。「昭和9年に隆哉、宮で『エチュード・No. 1』をやって、20何年かほぼ1/4世紀たつて、日本舞踊の世界で初めて純抽象作品を見た、感無量です」と云って下さいました。

雑誌「現代舞踊」が昭和28年に創刊され、私もそろそろ先生のクラスに出ることが出来るようになりました。ある時、船頭が舟をこぐ姿を先生の前でおどってみせました。「棹を押す姿も、押すだけなら両手で押せばいい、何のために動くか、日本舞踊には型があって、動きのどこをとらえるか最初につくった人がいて、表現がいいから型になってのこっている」といわれました。私は古典を踊る時に、あらためて踊りを見直し、今までに

ない観点から物を見ることが出来たということが、今も心にのこっています。

多くのモダンダンスに関心のある人たちが江口先生の周辺に集まるようになり、31年頃、月曜ごとに集まる「月曜会」が行われ、亡くなった平多正於さん、美二三枝子さん他多数の方たちがおられ、雑談する中でモダンダンス、バレエを始め日本舞踊、民族舞踊など広く行われている現代の踊りのあり方を人々の交流の中で学ばせていただきました。「あなたは日本舞踊家だから日本舞踊を中心に踊りをつくって欲しい。私達の真似をすることでなく、日本舞踊の人でなければ出来ないものを創造していかなければいけない。私の舞踊も日本の踊りとして、双方、2つの側から日本の踊りを創ってゆくことを、覚えておいて下さい」とおっしゃいました。

39年に芸術祭の賞を連続していただいた祝いのパーティをやりました。日本舞踊の先生方も大勢いらっしゃる中で「照奈さんがこれからやろうとしていることは、日本舞踊のためにつぶさないで、皆の力で押し上げてもらいたい」と江口先生は云われました。51年に日本女子体育大学に専攻科が出来て、それ以来、この学校で日本舞踊の科目を受け持たせて戴いております。

松本 さきのシンポジウム、今朝の講演、今迄のお話を通して、先生は人を残されたという思いを深く致しました。

先生への1番の感謝は、学校教育との接点を持たせて下さいましたこと。22年戦後初の文部省の指導要領が示され、学校の中で“ダンス”と名称をとるようになりました。「自発的な自分の表現をする」をねらいとして創作、鑑賞、表現技術の3つをかがけて指導内容を示しました。戦前とは180度の転換をみせ、この名称になりました。江口先生は22年「学校に於ける舞踊」という著書のはしがきに「人間性の発展に基盤をおいた創作的、芸術的ないき方になったことは、まことに喜ばしいことである。芸術としての本質が追究されるべきこと」と要綱の支持をして下さったので、作成委員であった私としては大きな助けを得たと感じました。その後体育関係の著書とか雑誌、研究誌などに座談会をもって教育にかかわる会を進めて下さいました。混迷の中の10年間、先生の力を得て歩いた人々は多数であったと思います。その後先生は学校教育にかかわってゆこうという積極的な姿勢ですごして下さいました。

2番目にあげたいのは、23年に日本女子体育専門学校の講師になられ、その後大学に籍をおかれました。日本の学校の舞踊教育にはじめてポストを占めた舞踊家であらっしゃった。そのポストが学校の舞踊に影響を及ぼした意義は大であると思っています。

42年、舞踊専攻ができて日本の大学制度の中に舞踊をめざして卒業してゆく課程ができました。今年は、この大学に金井先生や福田一平先生が担当される芸術スポーツ専攻の修士課程ができ、4月から開かれています。先生は時をこえて日本の舞踊教育の中に生きつづけているのだと、先生の業績と思うわけです。

3番目に舞踊に対する理念と方法として、先生の言葉に「洋々とした表現の自由・型がなくて内なるもののある創造だ。生の内容が豊かにたかめられてゆくことだ」という、学校と共有出来る舞踊に対する理念をお持ち下さった。方法は親しみやすい作品、詩情豊かで、写実を大切にし劇的なものを持ち、わかりやすい作品をつくる姿勢をつらぬいていらっしゃいました。自然運動を大切に、ダイナミックで明るく、開放的な動きをメインにおき、新しい試みの作品の芸風と、自分で工夫するという指導は、学校教育と共通するものがあり、すべての人々が親しみやすい世界でした。

4番目には、この大学に関係されてから、23年だったと思いますが中学・高校のダンスのコンクールを始められ、今日に及んでいます。これはクラブ活動として交流と評価を受ける機会をつくったことで、学校教育に対する大きな刺激になっています。連盟も5年前から神戸で全日本高校・大学ダンスフェスティバルを開き、3日間にわたり3000人余が参加する会をもっています。これだけ舞踊人口がふえているのは、先生がまかれた種がそれ丈の人口を育ててきたとも思われます。先生は学校教育に生きていく人々を感化して下さり、地盤を開いてくださいました。

先生が育てられた教育分野の人々は、非常に多く活動しておられます。先生はひらかれた人柄で、多くの人々をひきつけ、拘束せず、良い果実をくださった。暖かくサポートをして、開かれた心の芸術家として、今日の地盤をつくってくださったと思います。

桜井 それぞれの方の貴重なお話をありがとうございました。時間がなくなりディスカッションして戴くのが不可能になりました。会場からご意見ご感想を賜りたくよろしくおねがい致します。

(水田外史氏からお話がありました。

文責・桜井勤)

*1993年度春季第35回舞踊学会
『舞踊學』17号より転載